

## 通級指導教室への応援歌

ノートルダム清心女子大学人間生活学部児童学科 青山 新吾

私は、ずっと以前に小学校で通級による指導を携わっていた者である。それは今から15年近く前になる。それから時代は大きく移り変わった。では、その変化に伴って、通級による指導は、子どものことばの発達に関する指導は大きく変化したのであろうか？ また、脈々と受け継がれていることばの臨床に関わる知見は、今も意味を成すのであろうか？

本稿では、時代の流れを意識しながら、上記の問題意識について考えることで、子どものことばの発達を支え続けてきた通級指導教室担当者にとって必要な専門性を検討していきたい。

### 1. 個に応じた指導とは

通級による指導は「個に応じた指導」が得意技である。

このことは、特殊教育の時代から通級による指導の法制化、そして特別支援教育からインクルーシブ教育システムの時代へと移り変わっても、揺らぐことがないところだろう。しかし「個に応じた指導」と一口に言っても、実際には一括りにできない。

例えば、第1に、ある子どもが、何かできないことを有しており、その「できないことをできるようにする」ために「個に応じた指導」が成される場合である。いや、これこそが、一般的に「個に応じた指導」として認識されていることではないだろうか。

しかし、それだけではないのである。もう少し細かく見てみよう。

第2に、ある子どもが「周りと同じように合わせられるため」に成される場合である。これも1番目と同じく「できるようにする」ことを目的としたものである。

第3には、「今できることを活かして子どもが生き生きするため」に成される場合である。これは前者2つとは違う。今持っている手持ちの力で、現時点での子どもが生き生きと生活したり学習したりできることを目的としているからである。これは、その子どもが自分らしさを発揮できるようにするためだとも考えられる。

このように、「個に応じた指導」と一口に言っても、実際にはその内容には違いがあるため一括りにはできないのである。

現在の特別支援教育において、これらの整理は重要である。実際の学校現場では、「個に応じた指導」の名の下で、上記の整理を意識せず、個別の指導計画の目標として「できないことをできるようにする」ための事柄が設定されることが多いからである。また同様に、子どもの実態を無視して、とにかく「周りと同じように合わせられるため」の目的でのアプローチが行われている場合もあるからである。しかし、実際には子どもが成長するためには「今できることを活かして子どもが生き生きするため」の「個に応じた指導」も重要な要素であり、また、その子どもが所属する集団内での子ども同士の「協働性」の中での成長も欠かせない。

通級による指導は、単に「個別に子どもを指導する」のではなく、その子どもの成長のどの部分をどのように担うのかという視点を有し、それを子どもたち一人一人に対して検討、整理、提案、実践を追究していけることが重要である。そのための力を身につけることが、通級担当者の専門性として求められている。

## 2. エピソードを紡ぐ意味

当たり前であるが、通級による指導は「個に応じた指導」を得意とする。しかし、先述したように、それは単に「個別に子どもを指導する」ことを意味しない。

一人の子どもの成長に寄与できる「個に応じた指導」は、オーダーメイドである。それをどのように展開し、表現して周囲と共有できるのか。そのヒントの一つに「エピソード」がある。

本大会の提案の中で鯨岡峻氏が提唱する「エピソード記述」が示された。本稿ではこの「エピソード記述」に限定することなく、「エピソード」を綴ったり語ったりするものとして捉えて展開する。

ここで一つのエピソードを示す。フィクションである。

小さい時から通級で指導をしてきた〇〇さん。気付けばもう小学5年生である。  
人と話すのをとても苦手とし、話すことを嫌がっていた彼女も、今ではことばの教室内で、大好きなキャラクターのことをいろいろと教えてくれます。正直に書けば、以前の私は、彼女のその話がよく分からず、キャラクターにも関心がなかったのです。  
でも、毎回のように聞いているうちに、自分でもそのキャラクターをネットで検索して追究するようになっていて驚きです。 そう言えば、以前の彼女は「～だと思う。どうしてかというところ・・・」って、なんでも話に理由をつけないといけないと思って、常に話形を意識して話していたのです。学校で話形を教わって、それが分かりやすかったらしいのです。でも、授業中の発表じゃないんだから、いつでもそればかり意識していたら、話すのが楽しくなくなってしまいます。でも、今では、『このイラスト見て！ これって凄いでしょ！ だってこの色で塗ってあるもん・・・』なんて話で盛り上がっています。ここには、私に伝えたい「理由」がちゃんと入っているのです。

エピソードというものはとても魅力的である。

それは、エピソードにはその子と教師の「物語」いや、その子と周囲の「物語」が紡ぎ出されるからだろう。世界中で、ここにしかない「個別の物語」が紡がれる。そこには、単に子どもが何かをできるようになったことだけではない、その場面に生じている「意味」が見える。そして、教師も、単に「教える人」ではなくて、その物語に参加する一人の当事者となる。だから、教師自身の感情も、そのエピソードの中にことばとして示してみたいくなるのである。

この図式は、本来は通級による指導に限ったことではないはずである。通常の学級でも園でも同じことである。そう考えれば「学級の人数が多いから個別の指導はできない」のではなくて、人数が多くても、子どもたちはその場面で「個別の物語」を紡いで生きている。その「個別の物語」にまなざしを向けようとする営みを教育と呼ぶのではないだろうか。

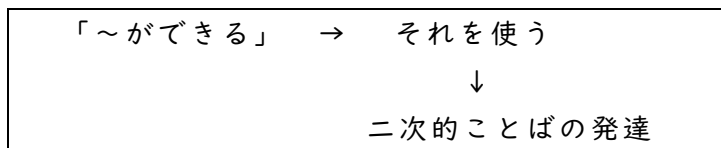
ちなみに、この世界観に立つと、悩ましいことが起きる気がする。子どもは、1, 2回の指導で大きく変化しないし、子どもの成長は、脈々とした「個別の物語」の先にある。

しかし、誰かから、分かりやすい指導の成果を強く求められると、無理矢理に指導と子どもの成長を結びつけたくなるという悩ましさが起きるのではないか。通級担当者は、この悩ましさにいかに向き合っていけるのだろうか。もしも本気で向き合うならば、そこには教師としての自分自身と常に「対話」を続け、「教師とは何か?」「教育とは何か?」という問いを忘れずに愚直に進むという「専門性」が必要なかもしれない。

### 3. ことばの発達とインクルーシブ教育

ことばには2つの機能がある。岡本夏木(1985)は「一次のことば」と「二次のことば」という整理を行った。「一次のことば」とは現実の生活場面で、自分をよく知っている親しい相手との間で、一対一の「会話」を通して使われるもの。「二次のことば」は、生活場面から離れて、不特定の他者に対して使われることばとされる。

通級による指導は、「一次のことば」に対しては明らかに得意としているだろうが、「二次のことば」にはどうやって立ち向かっているのだろうか。



一般的には、こういった図式が考えられるだろう。しかし、子どもの立場から考えると、これで「二次のことば」が使えるようになるのだろうか。

そこで考えてみたいのが、インクルーシブ教育の意味である。

青山(2019)は、特別支援教育が「個別のアプローチ」のみならず「集団へのアプローチ」や「子ども同士の関係づくり」も内包するかたちに拡大してきていること、そして「個別へのアプローチ」と「集団へのアプローチ」のバランスが重要であると指摘した。また学級経営と特別支援教育の視点の『融合』が重要であり、多様な子どもたちが生活し、学べる環境をつくらうとすることが、「個別のアプローチ」と密接に関連すると述べた。

これらの指摘は、インクルーシブ教育すなわち、「徹底的な個への関心」と「緩やかな協働性」によって、すべての子どもたちが成長していける教育と重なっている。特別支援教育の充実は、インクルーシブ教育を進める重要な要素の1つなのである。

インクルーシブ教育は、一人一人への「徹底的な関心」によって進む。その際、今回提案されているような、エピソードによる「個の物語」紡ぎは、「徹底的な個への関心」を具体化する1つの方法になると考えられる。そして、その「個の物語」の中に、通常の学級の担任を始めとする、その子どもの生活場面での人間関係が登場することも大切になるだろう。それは、単に「マスターしたことを活用する」場所の人でもなく、また、通級による指導で行ったことを「伝えられる人」でもない。子どもが通級による指導で見たこと、聞いたこと、感じたこと等々を共有できる関係として登場するのである。例えば、通級による指導で作った「番組」のリスナーが通常学級の先生や子どもたちであるといった人間関係が登場するとおもしろい。これこそが、「緩やかな協働性」である。こういった視点が、通級による指導の専門性には必要であり、今後に期待するところである。

#### 【参考文献】

青山新吾(2019)通常の学級における特別支援教育～その基盤となるもの～,兵庫教育2019.12月号,兵庫県教育委員会

岡本夏木(1985)ことばと発達,岩波新書